ウェスレーの罪理解

国重潔志

はじめに

英国国教会の司祭ジョン・ウェスレー（1703–1791）は、18 世紀英国のメソジスト運動の指導者の一人であり、後のリバイバリズムやホーリネス運動に多大な影響を与えた人物である。彼は、本論集の主題である罪の教理について、何か新たな教理を展開したわけではなく、それまで、教会内にあった罪に関するさまざまな教理を、その置かれた状況にあって彼なりに統合していった。本小論文では、彼なりにまとめていった罪の教理について概覧するとともに、その背後にあった思想にも触れつつ、東方教会も含めてキリスト教会全体での罪の教理に関する彼の立ち位置をとらえていきたい。

ルターやカルヴァンといったキリスト教会のタイタンと比べると、ウェスレーはあまりよく知られていないことから、まず最初に彼の生涯を簡単に辿りその過程での彼の罪の教理に対する関心に触れていく。続いて、罪の教理について彼の基本的な理解をまとめてみたい。

I. ウェスレーの生涯と彼の罪理解の発展

A. オクスフォードの回心（1725）

ジョン・ウェスレーは、1703 年英国国教会の司祭の家庭に生まれた。厳格なピューリタニズムの教育の下に育てられたとはよく指摘されるが[1]、基本的

[1] Robert Monk, *John Wesley: His Puritan Heritage* (New York, NY: Abingdon, 1966); John Newton, *Susanna Wesley and the Puritan Tradition in Methodism* (London: Epworth Press,

に彼は初代教会からエラスムスなどに見られるクリスチャン・ヒューマニズム[2]を大切にする国教会的霊的イーソスのうちに育てられ、これが後の彼の罪観に少なからず影響を与えた。

1720 年にオクスフォード大学クライスト・チャーチ・カレッジに進学し、1725 年大学の助手として研究を進めるために国教会の司祭の按手を受ける備えをする中で、トマス・ア・ケンピスによる『キリストに倣いて』から謙卑の重要性を、そしてジェレミー・テイラーの『聖なる生活・聖なる死の規律と実践（*Rule and Exercises of Holy Living and Holy Dying*）』から自らの心と生活のすべてが全知全能なる神の前に責任ある存在であるととらえ[3]、霊的に覚醒したウェスレーはオクスフォードの回心[4]を経験した。この、神の前に責任ある存在たる人間という理解は彼の神学を生涯貫き[5]、これが彼の罪観に大きな影響を与えた。

ウェスレーはその後、短期間牧会に携わった後オクスフォード大に戻り、そこでロー（William Law）の著作に触れた。ウェスレーと同世代であったロー

1968).

[2] 藤本の研究によると、17 世紀に興隆した「内的宗教」において強調された個人の宗教体験、実際的な道徳的な敬虔、真剣な霊性、修練と自己否定、そしてアルミニアン的に要求されている人間の意思と努力といったことをウェスレーは幼少期にその家庭で吸収していった。藤本満『ウェスレーの神学』（福音文書刊行会、1990）7–12 頁。参照 Frank Baker, "Wesley's Puritan Ancestry," *London Quartery and Holborn Review* 187 (1962): 180-186; Gordon Rupp, "Son of Samuel: John Wesley, Church of England Man," in Kenneth Rowe, ed., *The Place of Wesley in the Christian Tradition* (Metuchen, NJ: The Scarecrow Press, 1976).

[3]「私の全生活を、その思いも、言葉も、行いもすべて神に捧げることを決意した。というのは、神と自我との間に中立というものはなく、私の生活のすべての部分が、神への供え物となるか、それとも自我への、すなわち悪魔への供え物となるかの、どちらかであるということを徹底して確信したからである。」John Wesley, *The Works of the Rev. John Wesley, M.A.*, Thomas Jackson, ed., 14 vols. (London: Mason, 1829-1831), 11:366. 藤本訳、藤本『ウェスレーの神学』17 頁。なお、ジャクソン編によるこの全集は本小論文では、以降 *Works (Jackson)* と表記する。

[4] 藤本は、このオクスフォードの回心を「彼の生涯の最大の意識革命」と位置づける。藤本『ウェスレーの神学』17 頁

[5] 藤本『ウェスレーの神学』17 頁

は 17 世紀英国の「内的宗教」、あるいは「聖なる生活（holy living）」神学を受け継ぐ者であり、キリスト者の生活とは人間の原初の完全へと回復される過程であると主張し、この世のすべての事柄を、来世への準備としての個人の聖化へ目的論的にとらえる[6]。ここで注意すべきは、救いを赦罪という法廷のイメージではなく、罪を病としてとらえ、救いを魂のいやしのイメージとしてとらえる考え方にウェスレーは惹かれたことである。ローも含め、英国国教会は東西の初代教会教父らへの関心は高く、東方神学において顕著に見られるいやしの角度からの救済観[7]はウェスレーの神学の中心テーマとなっていった。さらにウェスレーはスクーガル（Henry Scougal）の『人間の魂の中の神の生命』の

[6] ローは、キリスト教とは「聖なる訓育過程であり、堕落した魂をいやし回復させ、我々の性質に、神とより一つになるような変化を起こし、高い次元の幸福へと我々を準備するためのものである」と述べている。William Law, *Christian Perfection*, in *Law's Works* 3:25. 藤本訳、藤本『ウェスレーの神学』23 頁

[7] 東方神学は、基本的に堕罪前の人間は無垢ではあったが完全では無かったと理解する。東方神学において、神の像（the image of God）は神のいのちに生きることを指し、神に似ること（the likeness of God）とはその神の像が人間のうちに実現していく過程（神化、deification）と理解する。この神化は神のいのちに連なることによって起き、人間は神に似ていくはずであったが、堕罪によって腐敗と死が人間のうちに入った。死は人間を大いに弱めはしたものの、恵みのすべてが取り去られたとは理解せず、神の恵みの招きに人間は応じ、神のいのちの交わりに再び入ることができると考えた。東方神学の「神化」については、現代の東方教会側からのものとして、Panaylotis Nellas, *Deification in Christ: Orthodox Perspectives on the Nature of the Human Person*, Contemporary Greek Theologians vol. 5 (Crestwood, NY: St. Vladimir Seminary Press, 1987); Georgios I. Mantzaridis, *The Deification of Man: St. Gregory Palamas and the Orthodox Tradition*, Contemporary Greek Theologians vol. 2 (Crestwood, NY: St. Vladimir Seminary Press, 1997). ロシアン・バプテストの背景を持つロシア系アメリカ人神学者によってまとめられたものとして、Vladimir Kharlamov & Stephen Filan eds., *Theosis: Deification in Christian Theology*, vol. 1, Princeton Theological Monograph Series (Eugene, OR: Wipf & Stock Pub., 2006); Vladmir Kharlamov ed., *Theosis: Deification in Christian Theology*, vol. 2, Princeton Theological Monograph Series, 156 (Eugene, OR: Wipf & Stock Pub., 2011). また西方教会側からの包括的なものとして Michael J. Christensen & Jeffery A. Wittung eds., *Partakers of the Divine Nature: The History and Development of Deification in the Christian Traditions* (Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2008) などが手頃なアウトラインを提供している。

中で説かれていた、キリストが人間の内に形造られていくことを救いの中心とする理解に大きな影響を受けた[8]。こうして、神の像に向かってキリストに似た者へ変えられていく[9]というような、救いを癒し、また神の生命への参与という東方神学的角度からとらえていく理解を若きウェスレーは吸収し、これが彼の罪理解に大きな影響を与えていった[10]。

B. アルダスゲート回心

その後、ウェスレーは米国のジョージアに旅立ち（1735）、入植していた英国人の司祭として牧会に携わるものの行き詰まり、失意のうちに帰国する（1737）。そしてアルダスゲート街でのモラヴィア派の集会で朗読されていたルターによるローマ人への手紙の註解書の序文に耳を傾けつつ彼は回心する（1738）。人間が義とされるのは功績によるのではなく神の恵みとキリストの十字架の贖いによるという理解は 1725 年のオクスフォードでの回心以降確かに彼は持っていたが、悔い改め後神から与えられる恵みを誠実に活かし聖化に邁進する者に、神は義認の恵みを与えられると理解していた。すなわち、信仰義認と新生抜きの救いの理解であり、「『神より生きる』という新生の起点なしに『神に向かって生きる』ことを一生懸命説いている神学」[11]であった。しか

[8]「真の宗教は、魂が神と統合すること、神のご性質に現実に参与し、神の像が魂に刻まれること、また使徒の表現を借りれば、「キリストが我々の内に形造られること」である。宗教の本質は神の生命であると表現する以外に、より優れた方法を私は知らないのである。」Henry Scougal, *Life of God in the Soul of Man*, Cockburn Edition (London: Downing & Straham, 1726), pp. 4-5. 藤本訳、藤本『ウェスレーの神学』26 頁

[9] こうした "the renewal of our souls after the image of God" は、ウェスレーの著述に頻出する。Wesley, *Letter* to Richard Morgan (1734/1/15); *A Further Appeal to Man of Reason and Religion*, Pt. I, §3, *Works (BE)*, 11:106; *A Plain Account of Genuine Christianity*, §II.12, Albert Outler, ed., *John Wesley* (Oxford: Oxford University Press, 1964), p. 191; *Sermon* #12, "The Witness of Our Spirit," §15; *Sermon*, #44, "Original Sin," §III.5.

[10] 1732 年にホーリークラブに入会した初代教父研究の専門家であるジョン・クレイトン（John Clayton）の助けによってウェスレーは東方教父を深く学んでいったと藤本は指摘する。藤本『ウェスレーの神学』26–27 頁

[11] 藤本『ウェスレーの神学』38–41 頁。藤本は、アルダスゲート回心前のウェスレ

し、モラヴィア派のシュパンゲンベルグ（August G. Spangenberg）との交わりや英国国教会の『説教集(*Homilies*)』などを通してプロテスタンティズムの信仰義認の教理に目覚め始めた[12]ウェスレーはアルダスゲート街での回心経験を経て信仰義認を経験し、宗教改革者らの罪観に接近した。さらに、次第に勢いを増してきていた啓蒙主義の中で理神論に立ち、ウェストミンスター大カテキズムに表されているキリスト教の原罪論を批判したテイラー（John Taylor）[13]に対し、ウェスレーは論争に加わりウェストミンスター大カテキズムを弁証した。

ウェスレーの指導するメソジスト運動が英国全体に広まっていく中で、若い頃から社会問題に積極的に取り組んでいたウェスレーは、英国の社会全体を覆っていた退廃的現実と対峙し、個人と社会全体を蝕む罪の現実について積極的に論じていた[14]。

まとめてみると、オクスフォード回心からアルダスゲート回心までの初期ウェスレーは、人間の原初の栄光と現在の窮状とを比較する中で罪の問題を論じ、

ーと信仰義認前のルターとが重なることを指摘する。すなわち、オッカムのウィリアムの説いた *Facere quod in se est.* と同類のものであると。

[12] アルダスゲートの回心の直前、2 回に渡ってウェスレーはウィリアム・ローに手紙を書いて義認の信仰に触れないローを非難している。その後も、ローの神秘主義に宗教改革的十字架の神学とが相容れないことをウェスレーは日誌に記している。Wesley, *Journal*, 1739/10/23; 1742/6/4; 1749/7/27. ウェスレーの日誌と手紙は、カーノックやテルフォードによってまとめられた定番的なものの他、ジャクソンによる全集や最新の *Bicentennial Edition* を始め、さまざまなものによって発刊・邦訳されており、そうしたことからここでは日誌の場合は日付、手紙の場合は宛先と日付を明記する。

[13] John Taylor, *The Scripture-Doctrine of Original Sin: Proposed to Free and Candid Examination* 3rd ed. (London: J. Wilson, 1740).

[14] 1762 年に The Society for the Reformation of Manners に招かれたウェスレーは、「すべての神の僕が、心と知恵と努力を合わせて悪魔の働きに抵抗するために結集し、神のために立ち上がり、外からのみならず自分たちの内側にも存在する、これらの洪水のように押し寄せる不義を征服すべき理由はふんだんにある」と説教している。 Wesley, *Sermon* #52, "The Reformation of Manners," intro., 4. ウェスレーの説教もさまざまに出版され、また邦訳されていることから、ここでは *Bicentennial Edition* の全集でアウトラーの与えた通し番号、そして原題とセクション番号を表記している。なお、この *Bicentennial Edition* の全集は、本小論文では *Works (BE)* と表記する。

アルダスゲート以降の中期ウェスレーは信仰義認の教理を説く中で罪の問題を論じ、そして後期（基本的に 1750 年以降）ウェスレーは啓蒙主義と対峙する中で社会全体を覆う罪の現実を論じていた。

II. ウェスレーの原罪観～西方の神学者として

原罪は聖書のうちには明確に記されていないが、使徒後教父や護教家のうちにその概念が表されはじめ[15]、西方教会では特にアウグスティヌス以降、原罪の教理として一つの神学分野として発展し、アダムの堕罪以降、すべての人間は罪の性質を持つ者として生まれ、それ故に罪を実際に犯していくと西方教会では理解されている。ここでは西方教会の一神学者であるウェスレーの原罪の教理について、その原罪がもたらす人間の現実、その原罪がいかに人間全体に伝播しているかの二点について見ていく。

A. 原罪のもたらす人間の窮状：全的腐敗

西方神学者の一人として、ウェスレーも原罪の教理を強く主張していた。原罪の現実の中で人は罪を犯す者となり、そして罪を犯していくという西方教会の理解にウェスレーも立っていた。彼が指導していたメソジストの年会にて、原罪について彼は以下のようにまとめている。

> 質問 15：アダムの罪は、いかなる意味において人類すべてに混入されているのか。
> 答え：アダムにおいてすべての者が死んだ。(1)我々の肉体が死ぬべきものとなった。(2)我々の魂も死んでしまった。即ち、神から分離した。それ故、(3)我々は罪深い・悪魔のような性質を持って生まれている。

[15] 初代教会の罪観については定番とも言える J.N.D. Kelly によるもののほか、福音的立場からは D. Smith、そしてローマ・カトリック神学者によるものであるが、ワイレーによるものは主に西方教会における原罪理解についての包括的なリサーチを提供している。J. N. D. Kelly, *Early Christian Doctrines*, rev. ed. (San Francisco, CA: Harper One, 1978); David L. Smith, *With Wilflful Intent: A Theology of Sin* (Wheaton, IL: Bridge Point Book, 1994); Tatha Wiley, *Original Sin: Origins, Developments, Contemporary Meanings* (New York, NY/Mahwah, NJ: Paulist Press, 2002).

> この理由をして、(4)人は皆、「御怒りを受けるべき子供であり」、永遠の死を免れ得ないのである。（ローマ 5:18、エペソ 2:3）[16]

さらに興味深いのは、アルミニアン[17]のウェスレーではあるが、自らがカルヴァン神学に最も接近する部分は、この原罪の教理であると彼自身理解していることである[18]。

> 質問 23：いかなる点において、我々はカルヴィニズムの間際まで近づくのであろうか。
> 答え：(1)すべての善を無償で与えられる神の恵みに帰し、(2)自然的な自由意志、及び恵みに先行する如何なる力をも否定し、(3)人間から如何なる功績も――たとえそれらが神の恵みによって引き起こされたものであったとしても――除外する点において[19]。

[16] Wesley, *Minutes*, 1744/6/25, *Works (Jackson)*, 8:277.

[17] 厳密に言うと、ヨーロッパ大陸にて展開されていたアルミニアン主義に立ってという意味ではなく、英国国教会の伝統の内にあるルネサンスに源を持つクリスチャン人文主義の伝統に立ちつつ、ウェスレーの時代の英国カルヴィニズムの中で主張もされた二重予定説に反しての立場という意味でのアルミニウス的、という理解である。ベイカーの研究によると、ウェスレーはアルミニウスの書物をほとんど読んだことは無かったと推測しており、確かにウェスレーの初期の日記にアルミニウスを読んだとの言及は無い。英国のカルヴァン派の人たちがウェスレーを（軽蔑の意味を込めて）アルミニアンと呼んだことを逆手にとり、自らをアルミニアンと自称するようになったと藤本は指摘する。Frank Baker, *Proceedings of Wesley Historical Society*, xxii, 118-19; Albert Outler, "Towards a Re-Appraisal of John Wesley as a Theologian," *Perkins Journal* 1966:10; William Owen Chadwick, "Arminianism in England," *Religion in Life*, 29 (1960):548-55. 藤本『ウェスレーの神学』68–69 頁

[18] ウェスレーは日誌で「私の義認の教理はここ 27 年間、常に一貫してきた。そしてこの教理では、カルヴァンと間髪すらの相違もない」と記している。Wesley, *Journal*, 1765/5/14.

[19] Wesley, *Minutes*, 1745/8/2, *Works (Jackson)*, 8:285.

アルダスゲートの回心後、ウェスレーは信仰義認に関連した説教[20]を次々に発表していったが、そこで彼は、人間は生まれながらにして全的に腐敗しており、ただ神の恵みのみによって人間は救われると主張していた[21]。

B. 罪の伝播について

アダム以降、いかにしてすべての人間が罪深い者として生まれてくるようになったかということについて西方教会ではリアリズム[22]とフェデラリズム[23]の

[20] アルダスゲート街での経験の後に執筆・発表され彼自身の説教集に収められている最初の 7 つの説教は、sola gratia, sola fide の教理が色濃く出ている。#1 (1738), "Salvation by Faith"; #2 (1741), "The Almost Christian"; #3 (1742), "Awake, Thou That Sleepest"; #4 (1744), "Scriptural Christianity"; #5 (1746), "Justification by Faith"; #6 (1746), "The Righteousness of Faith"; #7 (1746), "The Way to the Kingdom." 英国国教会の『説教集』やウェスレーの『説教』は、現代のキリスト教会でなされている説教とは異なり、神学的声明を意図して執筆・出版されていた。なお、本小論文中の説教の年は、T・スミスによるものではなく、アウトラーのものに拠る。

[21] ウェスレーの理解していた信仰義認について、藤本がこれをよくまとめている。藤本満「ウェスレーの義認論——『外在の義』と『内在の義』をめぐって」『ウェスレー・メソジスト研究』日本ウェスレー・メソジスト学会 4 号 (2003) 11－42 頁

[22] このリアリズムは、さらに伝遺説（traducianism）と創造説（creationism）の二つに分けられるであろう。伝遺説は、創世記 5:3 を主な根拠とし人間の体と魂のすべては親から受け継いでおり、すべての人間はアダムの肉体と魂を源に持つ故に原罪を持つと理解する。こうした考えを最初に示したのはテルトゥリアヌスであり、アダムに続くすべての人間はアダムの性質のかけらであるかのようにも受け取れることを示し、これは教会から退けられたが、アウグスティヌスはこの考えを一歩進めた。人間は両親の性交渉によって母の胎内にその肉体が造られその魂もまたそのときに造られ、そうして個人が造られる（generated）とアウグスティヌスは考えた。そうしたことから、アウグスティヌスのバージョンの伝遺説は generationism とも呼ばれる。しかし、創世記 2:7 でアダムの魂は肉体とは別に造られたと考えられることからこの伝遺説は批判を呼んだ。同時期の神学者らは、肉体は両親によって母の胎内で造られる（produced）が、魂は神によって直接造られる（created）と考え、これは伝遺説に対し創造説（creationism）と呼ばれた。しかしここで問題となるのは、神は罪深い魂を創造されるのかということである。この問題について、神の造られた魂は「肉」によって汚され罪深い魂となると理解されるようになり、アウグスティヌスのバ

二つに大別されるであろう。さてウェスレーは、原罪がいかに人間全体に伝播していったかについて[24]、その初期においてはリアリズムの立場をとっており、ウェスレー存命中は未出版に終わった説教 Image of God（1730）では、アダムとエバが口にしたものには人を朽ちるものとし、さまざまな能力を弱める果汁があり、それが血管を通して体全体に広まったのではないかと想像もしている[25]。

しかし、アルダスゲート街での回心後、ウェスレーは改革派神学の原罪論に

ージョンの伝遺説は 5 世紀のローマの教会から退けられ、創造説が中世のスコラスティシズムを通し（Aquinas, *Summa Theologica*, I-II, qq. 81-83.）、宗教改革のごく初期まで西方教会で主流の理解であった。Heinrich Heppe, *Reformed Dogmatics: Set Out and Illustrated from the Sources*, rev. ed. (Grand Rapids, MI: Baker, 1978), pp. 341-2. なお、ルターは彼自身のアウグスティニアンとしてのつながりから、アウグスティヌスのバージョンの伝遺説をとり、これが続くルター派に影響を少なからず与えた。Heinrich Schmid, *The Doctrinal Theology of the Evangelical Lutheran Church*, 3rd ed. (Minneapolis, MN: Augsburg, 1899), pp. 166-68, 248-50.

[23] このフェデラリズムの起源もアウグスティヌスである。彼の手にしていたヒエロニムスによるウルガタ訳のラテン語聖書において、ローマ 5:12 は「すべての人間はアダムにあって罪を犯した故に死はすべての人間に広まった」という誤訳であったが、アウグスティヌスはこれをもとに、人間すべてはアダムにあって罪を犯したのでアダムの罪責を負うのは当然であると論じた。宗教改革期、法的イメージによる救済論を展開していった改革派は、罪の伝播を生物学的創造説とすることに難しさを覚えたことから、アダムは人間すべての法的代表者あるいはフェデラル・ヘッドであるとし、アダムの罪責はすべての人間が負うべきものであると論じた。カルヴァンは、この転換に重要な役割を果たした。Heppe, *Reformed Dogmatics*, pp. 227, 331-5. なお、ウルガタ訳のローマ 5:12 の誤訳についてカルヴァン自身は気づいていた。*Calvin's New Testament Commentaries* (Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1960), 8:111-12. リアリズム的創造説に対するこのフェデラリズムはプロテスタンティズム全体に大きな影響を与えていった。Schmid, *Doctrinal Theology*, pp. 239-40.

[24] ウェスレーは、その手紙の中で原罪がいかにして伝播されていったかについて興味がないというようなことを書いているが、これは自身の立場を強固に主張していたラムゼイに辟易しての皮肉であり、実際のところ、この問題について少なからず関心を持ち取り組んでいた。Wesley, *Letter*, to Dr. John Robertson, 1753/9/24.

[25] Wesley, *Sermon* #141 (1730), "The Image of God," §II.1-5.

接近していくなかで、アダムは人間の代表であると論じるようになった[26]。さらにルター派のベンゲルの註解書[27]を底本とした『新約聖書略註』のローマ5:12 のところで、ウェスレーはベンゲルにならい「死は人間すべてに広まり、そのうちにすべては罪を犯した」とギリシャ語に忠実に訳しつつも、その註にて、アダムは全人類の代表であって、すべての人間はアダムにあって罪を犯したと述べた[28]。さらに『新約聖書略註』を出版した翌年、先に述べたジョン・テイラーに対する論争に加わる中で[29]、ウェスレーはテイラーの批判したウェストミンスター大カテキズムの中の imputed depravity の教理を擁護[30]し、すべての人間はアダムにあって霊的に死んだというアプローチを見せつつ[31]、彼なりのフェデラリズムを展開している[32]。その一方、このテイラーに対する反論の中でアダムに続く世代のうちに原罪は「自然に生じた」という英国国教会宗

[26] Wesley, *Sermon* #5 (1746), "Justification by Faith," §I.5-9.

[27] Johann Bengel, *Gnomon Navi Testamenti* (Tübingen: Schrammii, 1759).

[28] この『新約聖書略註』(*Explanatory Notes upon the New Testament*、本小論の脚注では *NT Notes* と表記し、聖書の引証箇所を記す) の中のもう一つ興味深い箇所はヘブル 12:9 であり、この箇所は改革派が伝遺説を批判する際の根拠となるところであるが、ウェスレーは自身の 1755 年版の *NT Notes* にて伝遺説をとるルター派のベンゲルに反し、この箇所に創造説の立場の註を与えている。Wesley, *Journal*, 1763/10/27.

[29] テイラーについてのウェスレーの最初の言及は 1748 年の日誌に見られる。Wesley, *Journal*, 1748/8/28. そして 1751 年にこの論争に加わる決意をし、テイラーに対する反論の論文は 1756 年に発表された。Wesley, *Journal*, 1751/4/10.この論文は *The Doctrine of the Original Sin* という題名で発表された後、これを編集したものが説教 *Original Sin* として説教集に含まれた。Wesley, *Sermon* #44 (1759), "Original Sin."

[30] Wesley, *The Doctrine of the Original Sin*, Pt. II, §II.2; Pt. III, §1; Pt. III, §6., *Works (Jackson)*, 9:262-3, 314-17, 332-4.

[31] Wesley, *The Doctrine of the Original Sin*, Pt. II, §I.3, §I.6, §I.8, *Works (Jackson)*, 9:240, 244, 247, 258.

[32] 「『アダムは来るべき方のひな型なのです』〜アダムもキリストもともに公的な存在、人間のフェデラル・ヘッドである。前者は、その犯した行為の故に罪と死との源泉となり、後者は、その無代価の贈り物の故に義と生命との源泉となった。」Wesley, *NT Notes*, Rom. 5:14.

教箇条中の理解にならいつつ[33]、アダムに続く人間すべてにアダムの腐敗性を神は積極的な意志をもって与えたという考えに難しさを示し[34]、創造説の立場に近づきつつ[35]、最終的には原罪の伝播についてこれを明確に定義づけることは意図的に避けている[36]。その後伝遺説の立場を主張する著作物に触れたウェスレーは[37]、その要約を出版し[38]、伝遺説にも一定の理解を示している。

このように、ウェスレーには罪の伝播の理解についてフェデラリズムとリアリズムの両方の考えを見せている。ウェスレー研究家の中には、こうした違いについて、前期ウェスレーはリアリズム、中期ウェスレーはフェデラリズム、そして後期ウェスレーはリアリズム（伝遺説）に回帰と理解する者もいるが、中期ウェスレーのテイラーに対する反論の中でフェデラリズム一辺倒ではないところが見られる一方、後期ウェスレーがフェデラリズムを撤回した形跡はない[39]。

[33] Wesley, *The Doctrine of the Original Sin*, Pt. II, §II.13, *Works (Jackson)*, 9:275-8.

[34] Wesley, *The Doctrine of the Original Sin*, Pt. II, §III, *Works (Jackson)*, 9:294.

[35] ウェスレーはテイラーに対する反論の中で、神は人間腐敗の the First Cause となりうるが、人間の being、あるいは人間の性質が腐敗性の理由たりうると述べ、「肉」によって人のうちに罪の性質が存在するという創造説の理解にも近づいている。Wesley, *The Doctrine of the Original Sin*, Pt. II, §II.6, 16, Pt III, §VII, *Works (Jackson)*, 9:267, 282, 334-9.

[36] Wesley, *The Doctrine of the Original Sin*, Pt. II, §VII, *Works (Jackson)*, 9:335.

[37] ウェスレーは 1762 年に伝遺説を主張するウールノーの著作物を読んだ。*Journal* 1770/11/7. Henry Woolnor, *The True Original of the Soule*, 1641. 参照 Randy Maddox, *Responsible Grace: John Wesley's Practical Theology*, (Sherborne, Dorset: Kingswood Books, 1994), p. 80.

[38] *Arminian Magazine* 6 (1782):146-9, 195-7. ウェスレーはキリスト教の歴史の中で意義深いものと判断したものは、たとえそのすべてに同意できずとも自身の編纂するクリスチャン・ライブラリーに加え発刊し、また自身が編集する *Arminian Magazine* に掲載していった。そうしたことから、クリスチャン・ライブラリーに伝遺説に立つものを加えたからといってウェスレーは伝遺説に立場を移したと結論するのは早計である。彼の説教や論集、日記や手紙を含めた著作物全体の中で判断されるべきである。

[39] マドックスは、ウェスレーがウールノーの著作物をクリスチャン・ライブラリーに加えたことをもって後期ウェスレーは伝遺説に戻ったと理解する。Maddox, *Responsible Grace*, pp. 78-81. しかし、フェデラリズムが色濃く出ているローマ

ウェスレーは聖書など[40]に照らし合わせてそれが明らかに誤りであると結論できない場合、一見して相対立するようなものを敢えて両者とも保持し、その両者の対話のうちに真理を追究するという英国国教会ならではの via media[41]とも呼ばれる神学的方法論に立っていた[42]。そうしたことから、原罪伝播の理解について、基本的には英国国教会の宗教箇条における「アダムの子孫に自然的に生じているもの」と述べられている理解に従い、すべての人間にいかに自然的に生じているかの説明については、フェデラル的説明とリアリズム的説明の

5:14 の部分をウェスレーは生涯撤回しなかったことから、マドックスの解釈には難しさが見られる。

40 ウェスレーの神学的方法論について、アウトラーは「ウェスレーの四辺形(Wesleyan Quadrilateral)」という概念でこれをまとめた。これは、聖書、歴史、経験、理性に照らし合わせて考察を施すというものである。Albert Outler, "The Wesleyan Quadrilateral in Wesley," *Wesley Theological Journal*, vol. 20, num. 1 (1985):7-18; Donald A. D. Thorsen, *The Wesleyan Quadrilateral: Scripture, Tradition, Reason and Experience as a Model of Evangelical Theology* (Nappanee, IN: Evangel Publishing House, 1997); Ted A. Campbell, ed., *Wesley and the Quadrilateral: Renewing the Conversation* (Nashville, TN: Abingdon, 1997).

41 英国国教会は、その独特な神学的発展から、その神学的方法論は via media と言われる。すなわち、相反する意見が対峙するなかで、どちらかに一方的に肩入れせず、その両者の対話のうちに真理を探る方法をよしとする方法論である。こうした方法論について、以下のものが手頃なアウトラインを提供している。Stephen Neill, *Anglicanism* (New York: Oxford University Press, 1978); John R. H. Moorman, *A History of The Church in England*, 3rd ed. (New York: Morehouse Pub., 1980); Stephen Sykes, John Booty, Jonathan Knight, eds. *The Study of Anglicanism*, rev. ed. (Minneapolis, MN: Fortress Press, 2009); Mark Chapman, *Anglican Theology: Doing Theology* (New York: T. & T. Clark International, 2012).

42 ウェスレーは、相対立する意見の両者にそれなりの聖書的、歴史的、経験的、理性的根拠が見られる場合、その両者の対話のうちに神学的バランスを保ちつつ真理を模索した。こうしたウェスレーの神学的方法論をアウトラーは「第三の選択肢を模索する神学思考」と呼び、野呂は「楕円の神学」と呼ぶ。罪の伝播の問題についても、ウェスレーのこうした態度が見られる。藤本の『ウェスレーの神学』は、ウェスレーを学ぶ際、こうしたウェスレーならではの独特なバランス感覚をよくわきまえつつウェスレー研究を進めることを強調しつつ締めくくっている。Albert Outler, "John Wesley as Theologian—Then and Now," *Methodist History*, vol. 12 (July 1974):65. 野呂芳男『ウェスレーの生涯と神学』(日本基督教団出版局、1975) 633 頁。藤本『ウェスレーの神学』435−436 頁

いずれにもある程度の妥当性を認めていたと結論できよう。

まとめてみると、ウェスレーは原罪の教理においては改革派の理解に限りなく近い立ち位置で全的堕落の立場をとり、原罪の伝播については西方教会の伝統の中にあったフェデラリズムとリアリズムの両者を認めるという、西方のプロテスタント教会の一員として標準的な理解を持っていたと言えよう。そのウェスレーが罪の理解について西方教会の中で、またプロテスタンティズムの中で異色を放つのが、次に述べていく救いの過程における罪の扱いである。

III. 罪と救い

A. 罪と先行的恵み

ウェスレーは、信仰義認を説く際、人間の原罪による徹底した窮状を論じ、個人の犯した罪による罪責の重さを冷徹に述べた[43]。そして人間が義とされるのはただキリストの十字架の贖いによってのみであり、それは信仰を通してキリストの功績を受け取ると主張した[44]。そのように理解する人物が、何故に神人協同説のようなものをとっているのかという議論[45]が起きるであろう。先に

43 「あなたは神の怒りをなだめるために、自分のすべての罪を贖うために、また当然受けるに値する刑罰を免れるために、何をしようとするのか。……ああ、あなたは何をすることもできない。一つの悪の行為・言葉・考えにさえ、神の前に償いをするなど、いかにしても不可能である。」Wesley, *Sermon* #7, "The Way to the Kingdom," §II.5.

44 「厳格に言えば、我々を義とするのは、即ち、罪の赦しを獲得するのは、我々の信仰でも行いでもない。神ご自身が、恵みの故に、ただ御子の功績を」通して、我々を義とされる。しかしながら、我々は信仰によって神のあわれみの約束と罪の赦しの約束を掌握するので、それ故聖書は、信仰によって義とされるという表現をとっている。そう、まさに業を抜きにした信仰である。」Wesley, "The Principles of a Methodist," *Works (Jackson)* 8:362-3.

45 ウェスレーの伝統内にある神学者の間でさえ、この問題について議論が戦わされている。たとえばセルなどは、ウェスレーは神人協同説には立っていないと主張した。George Cell, *The Rediscovery of John Wesley* (New York: Henry Holt, 1935), pp. 256-7, 270; Franz Hildebrandt, *Christianity According to the Wesleys* (London: Epworth Press, 1951), p. 173. それに対しキャノンらは神人協同説をとっていたと反論した。William Cannon, *The Theology of John Wesley, with Special Reference to the Doctrine of Justification* (New York: Abingdon, 1946), pp. 113-17; Harald Lindström,

述べた理神論者テイラーに対する反論の中でウェスレーは以下のように述べている。

> 人間の性質はその奥底まで堕落しており、悪に傾き、霊的に善なるすべてのものに対して反抗する性質を持っている。故に超自然的な恵みの助けなしで、神に喜ばれることを意志することも行うこともできない[46]。

信仰義認の経験に立つ際にウェスレーに大きな影響を与えたのはモラヴィア派であったが、その静止主義[47]に疑問を持ち、またウェスレーの時代の英国カルヴァン主義において特に顕著に見られた二重予定説と対峙するなかで、オクスフォードの回心以来ウェスレーのうちに流れ込んできた英国国教会のクリスチャン・ヒューマニズムと東方の教父らの救いの理解[48]は、ある程度の自由な

Wesley and Sanctification (London: Epworth Press, 1946), p. 215; Paul Samuel Sanders, "What God Hath Joined Together?" *Real Life* 29 (1960):495; Jürgen Weißbach, *Die Neue Mensch im theologischen Denken John Wesleys*, Beiträge zur Geschichte der Evangelish-methodistischen Kirche, 2, Studiengemeinschaftür Geschchte der Evangelisch-methodistischen Kirche (Stuttgart: Christliches Verlagshaus, 1970), pp. 71-5; Robert Vincent Rakestraw, "John Wesley as a Theologian of Grace," *Journal of the Evangelical Theological Society* 27 (1984):190. 基本的に、ウェスレー研究家の間で神人協同説について肯定的な考察がなされる場合、ローマ・カトリシズムのそれとは異なる種類の協同が強調されている。

46 Wesley, *Works (Jackson)*, 9:259-60. 下線筆者

47 「キリストは、すべてを聖霊の力で成し遂げ、地に火を下し、心に神の愛を注ぎ、死人に命のパンを与える。ここで、我々は何もせずに、ただ静かに神の御声に心を集中するだけである。」Nicholas von Zinzendorf, *Sixteen Discourses on the Redemption of Man by the Death of Christ* (London: Printed for James Hutton, 1740), p. 20. 藤本訳、藤本『ウェスレーの神学』159頁

48 人は肉体を持つ故に罪を犯しても仕方が無いのだと説いたグノーシズムと、また運命論的世界観を展開していたストイシズムに対して戦った使徒後教父と護教家ら、特に東方の教父らは、人は神の前に責任を問われるものという理解に基づいて人の罪の現実を説いた。これはウェスレーの人間観に通じるものである。基本的にウェスレーの人間観は国教会内のクリスチャン・ヒューマニズムにルーツがあると指摘する藤本と同じ立場を筆者もとるが、これら東方教父の

しに罪を犯す人間を神が罰するのは不条理であるという理解にウェスレーを導いた。人間は確かに神の嘉納する思いも行いも自力で持つことは決してできない。しかし、神の主権[49]による超自然的な恵み[50]によって、(1)何が善であり悪

人間観のもたらした影響も看過できないとも考える。Tatha Wiley, *Original Sin: Origins, Developments, Contemporary Meanings* (New York/Mahwah, NJ: Paulist Press, 2002).

49 「信仰と救いの創始者は、神おひとりである。我々の内に働いて、志を立てさせ、ことを行わせてくださるのは、神である。神こそは、すべての祝福の唯一の贈り主であり、すべての良き業の唯一の創始者である。人間の内には功績はもちろん、実行する力さえない。すべての功績は、神の御子の内にあり……すべての力は神の霊の内にある……救いのすべての働きは……まったくもって神の御霊の働きかけによる。」ウェスレー『さらなる訴え』Pt. 1, i.6. 藤本訳、藤本『ウェスレーの神学』126頁

50 一般的に、恵みの理解について西方教会と東方教会とで議論になることの一つは、救いの恵みは創られたものか否かである。基本的に西方教会は救いの恵みは神によって創られ人間に与えられるものと理解し、それは外なるものとして人間に与えられると見る（プロテスタント）か、人間の服従のうちに神から与えられる *habitus* と見る（ローマ・カトリック）。一方、東方教会は救いの恵みとは神によって創られ人間に与えられるものではなく、神の力そのものであって、それは聖霊を通して人間の内に働き結果を起こさせるものと理解する。C. Moeller and G. Phillips, *The Theology of Grace and the Oecumenical Movement* (London: A.R. Mowbray and Co., 1961); Eusebius Stephanou, "The Church Fathers on Divine Indwelling and the Theology of Grace," *Patristic and Byzantine Review* 11 (1992):18-20. 興味深いことであるが、カルヴァンは、恵みを外なるものとする理解から一歩踏み込み、選ばれた者に与えられる *semem fidei* を提起した。もっとも、後の改革派の発展においては、これが habitus と関連させて議論が進められる傾向も見られた。 Otto Gründler, "From Seed to Fruition: Calvin's Notion of the *semem fidei* and Its Aftermath in Reformed Orthodoxy," in *Probing the Reformed Tradition* (Louisville, KY: Westminster/John Knox Press, 1989), pp. 108-15. ウェスレーは、この点においても東方的理解を示し、そのソースは彼が愛読したエジプトのマカリウスの『説教』であろうということでウェスレー研究家らは一様に指摘している。こうした恵み観が、ウェスレーの先行的恵みの教理を理解する助けになるのではと考えられる。ウェスレーとマカリウスの関係については、以下のものを参照のこと。Robert Vincent Rakestraw, "The Concept of Grace in the Ethics of John Wesley," Drew University Ph.D. thesis, 1985, pp. 98-102; Hoo-Jung Lee, "The Doctrine of New Creation in the theology of John Wesley," Emory University Ph.D. thesis, 1991, pp. 190-1.

であるかの道徳律の一部分をアダムの堕罪後の人間の心に再び刻印して道徳的神の像を一部分回復させて人間に善悪の基準を備えさせ、(2)刻印された神の律法を認識する良心を備えて善悪の判断能力を持たせ、(3)そうして認識された道徳律を実際に選び取って行動に移す自由意志を備えさせる[51]。そうして神の働きかけに対して人は応答（reaction）[52]して人は覚醒し、罪を確信させられ、自分自身の思いと業に絶望し[53]、キリストの恵みのうちに悔い改めに導かれる。この超自然的な恵みが先行的恵みである。

人間のあらゆる思いや行いに先行して神から超自然的恵みがすべての人間に与えられているとはいえ、人間の魂は「偶像崇拝、傲慢、自己中心、世を愛する思い」[54]といった罪に汚されており、「ほとんどの人間が、善い思いが根を張り、実をつける前に、その思いを打ち消してしまう」[55]のが現実であることをウェスレーは認識していた。また、先行的恵みによって、義認前の段階である程度の善い思いや行いが芽生えてはいても、悔い改めて信仰によって義と認められるに至った段階とでは、救われているか否かという決定的な違いがある。トリエント会議において示されたような、人間は先行的恵みと協力することで愛によって形成される信仰を養い階段を昇るように義認を獲得するとはウェスレーは理解せず、神の律法を前に、自分は罪人でしかないことを認め[56]、自らを義としようとするあらゆる努力を放棄せねば決して救いの信仰には至らないと主張する[57]。

---

[51] 藤本『ウェスレーの神学』161 頁

[52] ウェスレー以前、reaction の意味は “repulsion exerted in opposition to impact of pressure”であったが、ウェスレーによって、reaction の意味は “influence which a thing, acted upon by another, exercises in return upon the agent”となったと *Oxford English Dictionary* は示している。E. H. Sugden, *Wesley's Standard Sermons*, 2 vols. (London: Epworth Press, 1921), 1:304, n. 1.

[53] Wesley, *Sermon* #9, “The Spirit of Bondage and of Adoption,” §II.6.

[54] Wesley, *Sermon* #44, “Original Sin,” §III.1.

[55] Wesley, *Sermon* #85, “On Working Out Our Own Salvation,” §III.4.

[56] ルターの論じた神の *opus alienum* と *opus propernum* をウェスレー自身も論じている。Wesley *Sermon* #7, “The Way to the Kingdom,” §II.6.　藤本『ウェスレーの神学』165 頁　脚注 11

[57] Wesley, *Sermon* #18, “The Marks of the New Birth,” §I.3; #34 “The Original, Nature,

B.　アダムの罪責とアダムに続くすべての人間

アダムの罪責についても、ウェスレーは西方教会の基本的理解、また洗礼による再生を認める国教会の伝統に従い、洗礼による再生、すなわち原罪の罪責は洗い流されなければ神の御国に迎え入れられることはないとの理解に立っていた[58]。

もっとも、ローマ・カトリック教会の *ex opera operato* のような、洗礼による自動的新生の立場もとらなかったウェスレーは[59]、悔い改めと信仰義認の教理とこの洗礼理解の調和に苦心するなかで、アルミニアン的救済観と先行的恵みの教理によってこの問題を整理していた。すなわち、洗礼という基本的な型（form）のうちにキリストの恵み（matter）によって原罪の罪責は無効にされねばならない一方、洗礼は原罪それ自体を無くすものではなく、人の内になお存在する原罪に流されて罪を犯す者は、その罪責によって裁かれると理解した。それ故、人は悔い改め信仰を通して義認の恵みを頂かねば救われないと説いた。

その一方、ウェスレーは洗礼を受けないまま生涯を閉じた幼児や福音を知らない異教世界の人々がアダムの罪責によって滅びに定められるとも理解しなかった。これを藤本はウェスレーが「不可抗的な無知」という隙間を原罪の教理に入れていた神学者であると指摘するが[60]、人間が生まれる際、キリストの普遍的な贖いの業の先行的恵みによりキリストの義がアダムの罪責を覆うためであるとウェスレーは考えた[61]。

Properties and Use of the Law,” §IV.1-2; #35 “The Law Established through Faith, I,” §I.3; #20 “The Lord Our Righteousness,” §II.11; *Minutes*, 1744/6/25, 1745/8/1-2, *Works (Jackson)* 8:275-85; *A Farther Appeal to Men of Reason and Religion*, Pt. 1, §VII.12, *Works (BE)* 11:196.

[58] Wesley, *A Treatise on Baptism*, §IV.2. *Works (Jackson)* 10:193.

[59] Wesley, *Sermon* #45 “The New Birth,” §IV.2.

[60] 藤本『ウェスレーの神学』352 頁

[61] Wesley, *Minutes* (1744/6/25), Q. 16.　「幼児は、アダムの罪の責任の故に地獄に送られることはない。彼らがこの世に生まれ出ると同時にキリストの義がアダムの罪責を覆うからである。」*Letter* to John Mason, 1776/11/21.　東方神学に大きな影響を受けていたウェスレーではあるが、アダムの罪責の処理に注意を払う点で、アダムの罪責を否定する東方神学の罪観と異なる面を見せる。東方神学の罪観については、以下のものが手頃なアウトラインを提供している。J. Patout

そうなると、幼児洗礼は無意味であるかというと、ウェスレーはそうは考えず、幼児洗礼を通して与えられる神の恵みを重視したウェスレーは生涯にわたって幼児洗礼の重要性を主張していた。これ以上は紙数の制約故論じることができないが[62]、ウェスレーは西方教会の一員として原罪の罪責の事実とその深刻性をとらえ、その処置なくして救いは成立しないと理解しつつ、礼典主義と福音主義のバランスでアダムの罪責の処理を考えていた。

C. 罪と聖化

罪の理解について、西方教会は基本的に罪人の、神を始めとする他者に対する違反と罪責に強調点を置く傾向があるのに対し、東方教会は罪人自身のうちにある罪深い性質に強調点を置く傾向がある。オクスフォードの回心で東方的に罪人自身の内にある罪深い性質の問題を注視し、アルダスゲート街での経験から、西方的に罪責の問題に取り組むようになったウェスレーは、罪について考える際、罪責と罪性の二つの問題を考えていた[63]。すなわち、罪がもたらす神と人間との関係の問題を考えるときウェスレーは法廷的イメージで考えるが[64]、罪人たる人間自身について考えるとき、ウェスレーは癒し的イメージで

Burns, "The Economy of Salvation: Two Patristic Traditions," *Theological Studies* 37 (1976): 598-619; Stephanou, "The Church Fathers on Divine Indwelling and the Theology of Grace," pp. 11-32.

62 ウェスレーのこうした「礼典的福音主義」と「福音的礼典主義」の複雑なバラン　　スについて、実際のところウェスレー研究家の間でも意見が分かれ、礼典主義者、あるいは福音主義者のどちらかでまとめあげようとする傾向が強い。そうした中でウェスレーのうちに礼典と福音の統合があったことを示す藤本の研究は特筆ものである。藤本『ウェスレーの神学』347−366 頁

63 「自分自身との関連で考えてみるならば、罪は鉄の鎖であり真鍮の足かせである。罪は世と肉と悪魔が私たちを深く切り裂き、ずたずたにした傷である。罪はまた病であって、我らの血と心を飲み干し、我らを墓穴に引きずり込む。しかし、神との関連で考えてみるならば、罪はあまりにも膨大で数え切れない負債であると言うことができる。」Wesley, *Sermon* #26, "Upon Our Lord's Sermon on the Mount, VI" §III.13.

64 Wesley, *NT Notes*, 1 John 3:4. "[The sinner] transgresses the holy, just, and good law of God, and so sets his authority at nought."

これを考え、罪を「忌まわしい病」[65]と見ていた。人は生まれながらにして神とそのいのちから離れていることから腐敗した性質を持っており[66]、その性質故に人間の知識は暗くなり[67]、意志は間違った思いに囚われ[68]、自由も失われ[69]、良心はその基準を失い[70]、そうして人間は個々の罪（罪深い言葉と罪深い行為）を犯していく。こうして神と隣人を愛さず、動植物に対しても残酷になり[71]、最後には幸せを経験することも自分自身を受け容れることもできなくなる[72]。

義認は人間の罪責に赦しの解決を与えて神と人間との和解を成立させ、そして人間の魂を蝕み、罪を犯すように傾かせる病としての人間の罪深い性質[73]については、聖化による魂の癒しがキリストによって与えられるとウェスレーは考えた[74]。これは、人の神との正しい関係とは単に罪赦され滅びから免れてい

65 Wesley, *Sermon* #21, "Upon Our Lord's Sermon on the Mount, I," §I.4.

66 Wesley, *Sermon* #5, "Justification by Faith," §I.5; *Sermon* #21, "Upon Our Lord's Sermon on the Mount, I," §4; *NT Notes* Rom. 6:6. 参照 Donal J. Dorr , "Total Corruption and the Wesleyan Tradition," *Irish Theological Quarterly* 31 (1964):303.

67 Wesley, *Sermon* #44, "Original Sin," §II.3.

68 Wesley, *NT Notes*, Rom. 6:6; *Sermon* #40, "Christian Perfection," §II.25-7.

69 Wesley, *NT Notes*, Eph. 2:1.

70 Wesley, *Sermon* #34, "The Original, Nature, Properties, and Use of the Law," §I.4.

71 Wesley, *Sermon* #60, "The General Deliverance," §I.6.

72 Wesley, *The Doctrine of Original Sin*, Pt. 1, §II.14, *Works (Jackson)*, 9:235.

73 Wesley, *The Doctrine of Original Sin*, Preface §4, *Works (Jackson)*, 9:194; *Sermon* #44 "Original Sin," §III.3f; *Sermon* #54 "On Eternity," §16; *Sermon* #95 "On the Education of Children," §4; *Sermon* #109, "The Trouble and Rest of Good Men," Proem.

74 「義認とは、実際に正しい・義なる者となることではありません。それは、聖化のことです。聖化が、ある程度、義認の直接的な実であることは事実ですが、それ自体神の異なった賜物であり、義認とは性質を完全に異にします。義認は、神がひとり子を通して私たちのためになしてくださること（does for us）を意味し、他方、聖化は聖霊によって私たちの内に働いてくださること（works in us）を意味します。」Wesley, *Sermon* #5, "Justification by Faith," §II.1　義認と聖化の統合は、アウグスティヌス、ルター、そしてカルヴァンらも取り組んでいるが、義認に軸足を置いたルターやカルヴァンとことなり、プロテスタント的 sola fide を堅持しつつ聖化を目標に救済論を組み立てたウェスレーは、16 世紀に分離しつつあったプロテスタントとローマ・カトリックとの間の架け橋を試みた Martin Bucer と Gropper/Contarini の *iusutitia duplex* [*The Regensburg Book* (1541)]や Melanchton の *causa concurrens* に近いとアウトラーは指摘する。Outler, "Wesley

る以上に、神に対しては神を知り、愛し、従い、そして神との交わりを永遠に楽しみ[75]、隣人に対しては愛をもって仕え[76]、他の被造物に対しては愛をもって保護する[77]という愛の業なる御霊の実を実際に結び、そうして自分自身をも正しく受け容れること[78]があってこそと、理解していたことによる[79]。そうして新生した人間はキリストを模範として恵みによって愛に成長し、ついには神と隣人への愛が人間の心と実際の言動[80]とを統べ治め（ruling）[81]それが恒常的な心持ちとなるほどの程度の成熟があるとし、これをキリスト者の完全と呼ん

in the Christian Tradition," *The Place of Wesley in the Christian Tradition*, ed. Kenneth Rowe (Metuchen, NJ: Scarecrow Press, 1976), pp. 23-33.

[75] Wesley, *An Earnest Appeal to Men of Reason and Religion*, §46, *Works (BE)*, 11:62; *The Character of a Methodist*, §5, 13, *Works (BE)*, 9:35, 39.

[76] 神と隣人への愛は必ず両立すべきとウェスレーはしばしば強調していたが、その中で代表的なものは、Wesley, *Letter* to John Glass (1757/1/1).

[77] Wesley, *Sermon* #60, "The Great Deliverance," §I.6; *Sermon* #45, "The New Birth," §I.1.

[78] Wesley, *NT Notes*, Luke 11:33, John 1:4; *Sermon* #7, "The Way to the Kingdom," §I.10.

[79] カルヴァンも興味深い洞察を与える。 "For we have been adopted as sons by the Lord with this one condition: that our life express Christ, the bond of our adoption. Accordingly, unless we give and devote ourselves to righteousness, we not only revolt from our Creator with wicked perfidy but we also abjure our Savior himself." John Calvin, *Institutes of the Christian Religion*, John T. McNeill, ed., translated and indexed by Ford Lewiss Battles (Philadelphia, PA: Westminster Press, 1970), III.6.3.

[80] "[Christian Perfection is] the humble, gentle, patient love of God, and our neighbor, ruling our tempers, words, and actions." Wesley, "Brief Thoughts on Christian Perfection," *Works (Jackson)* 11:446; *Minutes*, 1744/6/26, *Works (Jackson)*, 8:279.

[81] カルヴァンのものと比べると興味深い。 "Now the great thing is this: we are consecrated and dedicated to God in order that we may thereafter think, speak, meditate, and do, nothing except to his glory . . . . We are not our own . . . . Conversely, we are God's . . . the Christian philosophy bids reason give way to, submit and subject to, the Holy Spirit so that the man himself may no longer live but hear Christ living and reigning within him[Gal. 2:20]. From this also follows this second point: that we seek not the things that ours but those which are of the Lord's will and will serve to advance his glory . . . . For Scripture bids us leave off self-concern, it not only erases from our minds the yearning to possess, the desire for power, and the favor of men, but it also uproots ambition and all craving for human glory and other more secret plagues." Calvin, *Institutes of the Christian Religion*, III.7.1-2.（下線筆者）

だ。その中心的概念は全き愛であり、神と隣人とを心を尽くし思いを尽くし精神を尽くして愛すことであり、また御父と御子の間の完全な交わりが、主と主の弟子らとの間に実現していくことである[82]。

ウェスレーにとってのキリスト者の完全とは、神の栄光のみ（*soli Deo gloria*）を求めての愛の動機の純粋さや意志の単一性であって[83]、実際の行為における完全性ではない[84]。キリスト者の行動の唯一の動機が愛である限り、その人物は愛の律法を成就しており、その意味で完全であるという理解をウェスレーは持っていた[85]。つまり、キリスト者として完成されたという意味での静的完全

[82] 「私が説いている完全は、全き愛のことです。すなわち、心を尽くして神を愛し、キリストを預言者・祭司・王として受け入れ、私たちの思いと言葉と行動とのすべてを支配していただくことです。」Wesley, *Letter* to Alexander Coates, 1761/7/7.

[83] 「我々の思いの目が、単一に神に集中しているとき、すなわちあらゆる事柄にあって、我々の神として、我々の相続分として、我々の力、幸福、想像を絶する報酬として、この世界においてまた永遠の世界における我々のすべてとして、唯一神を目指すとき、我々の心は単一になる。」Wesley *Sermon* #12, "The Witness of Our Own Spirit," §11. この単一性（simplicity）という概念はウェスレー独自のものではなく、たとえばカルヴァンのうちにも見られる。カルヴァンは絶対的完全は現世では実現不可能であると前後に注意書きしたうえで、以下のように述べている。 "What then? Let that target be set before our eyes at which we are earnestly to aim . . . . For in the first place, he everywhere commends integrity as the chief part of worshipping him [Gen. 17:1; Ps. 41:12; etc.]. By this word he means a sincere simplicity of mind, free from guile and feigning, the opposite of a double heart. It is as if it were said that the beginning of right living is spiritual, where the inner feeling of the mind is unfeignedly dedicated to God for the cultivation of holiness and righteousness . . . . Only let us look toward our mark with sincere simplicity and aspire to our goal; not fondly flattering ourselves, nor excusing our own evil deeds, but with continuous effort striving toward this end: that we may surpass ourselves in goodness until we attain to goodness itself. It is this, indeed which through the whole course of life we seek and follow." John Calvin, *Institutes of the Christian Religion*, III.7.5-6.（下線筆者）

[84] ウェスレーが指導していたメソジストの中から、自らが罪なき完全の領域にまで成長したと主張する者らが現れ、これを諌めようとしたウェスレーは逆に彼らから非難される始末であった。詳細は、藤本『ウェスレーの神学』74–76 頁

[85] Wesley, *Sermon* #27, "Upon our Lord's Sermon on the Mount, VII," intro.; #24, "Upon Our Lord's Sermon on the Mount, IV." §III.3; #62, "The End of Christ's Coming," §III.5-

ではなく、神に向かって全く進んでいるという動的完全である[86]。そのため、いかに動機が完全であっても、「無知や誤り、ほかの何千という人間的な弱さ」[87]によって非意図的な過ちや、なすべき正しいことを知っていながら行わなかったという「消極的な罪」(sins of omission) を犯す可能性は十分にあり、そして現実的にクリスチャンは犯してしまう。そして愛の完全にあるキリスト者とて犯してしまう罪は十字架の贖いの恵みを必要とする[88]。それ故に、日々自省的に自らを見つめ、悔い改めを欠かさない生活を強調した。ウェスレーは平均して週に数回ほど聖餐式に参加し[89]、彼のメソジストにも積極的に聖餐式に連なるよう指導していたが、国教会の祈祷書に従って進められる聖餐式では The Collect を始めとする祈りがあり、陪餐するには悔い改めが必須である[90]。つま

6; #107, "On God's Vineyard," §1.8.

86 こうしたウェスレーの完全観は、セオーシスに表される東方の救済観に親しんでいた彼ならではの特色である。ウェスレーと東方の救済観の関係については、Albert C. Outler, ed. *John Wesley*, p. 10; *Theology in the Wesleyan Spirit*, p. 73; Charles Ashanin, *Essays on Orthodox Christianity and Church History* (Indianapolis, IN: Broad Ripple, 1990), pp. 90-91; David C. Ford, "Saint Makarios of Egypt and John Wesley: Variations on the Theme of Sanctification," *Greek Orthodox Theological Review* 33 (1988):285-312; Stanley S. Harakas, *Toward Transfigured Life: The Theoria of the Eastern Orthodox Ethics* (Edina, MN: Light & Life Pub. Co., 1983), pp. 183-4.

87 Wesley, *Sermon* #40, "Christian Perfection," §I.1-9; *Minutes* (1758), *Works (Jackson)* 9:397; 「キリスト者の完全の追考」 *Works (Jackson)* 9:415; *Sermon*, #76, "On Perfection," §II.9-10.

88 「あなたはこの宝（全き愛）を土の器の中に入れているのです。あなたは、粗末な、土でできた、壊れやすい家に住んでいて、これが不死の魂を圧迫するのである。だから、思いも、言葉も、行動もすべて不完全であり、神の基準からかけ離れたものであり……よって、愛する主のところに行き着くまで毎瞬毎瞬、主よ、私はあなたの死の功績を必要としております、と言わなければならない。」Wesley, *Letter* to Miss March, 1763/4/7; *Minutes* (1758), *Works (Jackson)* 9:395, 364; *Sermon* #129, "Heavenly Treasure in Earthen Vessels," §II.1.

89 中期ウェスレーは平均して 3〜4 日に 1 回聖餐式に連なり、後期ウェスレーは 2 日に 1 回聖餐式に連なった。John C. Bowmer, *Sacrament of the Lord's Supper in Early Methodism* (London: Dacre Press, 1951), pp. 52-55.

90 個人的経験を差し挟むことをご容赦願いたいが、米国リバイバリズムの背景を持つ筆者が米国留学中、ウェスレーの時代の『共通祈祷書』とほぼ同じ様式で執り行われていた大学院の聖餐式に毎週連なるなかでキリスト者の完全の教理

り、信仰者の悔い改めは当然のことと考えている者らの間でキリスト者の完全が説かれていたことは、ウェスレーの完全論と罪（そして悔い改め）を理解する一つの鍵である。

まとめてみると、人は恵みにより、生活のあらゆる領域において神への愛の動機に基づき行動することが可能であり、キリスト者たる人間としての到達可能な完全はあるものの、現世における罪なき完全は無く、聖霊によって注がれる神の愛の動機に動かされつつも犯してしまう過ちには悔い改めが必要であるとウェスレーは説いた。

結び

冒頭に述べたように、英国国教会司祭のウェスレーは、その罪理解の内容、また罪を理解していく際の神学的方法論において、英国国教会の枠内で理解し論じていた。その英国国教会は、プロテスタントとローマ・カトリック、あるいは西方と東方の教会の対話のなかで聖書的バランスを探ることをよしとする伝統である。

ウェスレー自身の罪理解について、特に信仰義認と全的腐敗の理解において彼は西方教会のプロテスタンティズムの立場に立つ。その一方、罪の伝播についてはローマ・カトリックとプロテスタントの両者を含む西方教会全体の理解の幅をそのまま受け入れた。またルネサンス以来のクリスチャン人文主義や東方の初代教会教父らにあった、人間は神の前に責任を問われる存在であることから罪を考え、原罪を魂を蝕む病[91]としてもとらえた。その結果、罪と救いに

のうちにも毎週真摯な悔い改めに励む霊性に触れ、多くの示唆を得た。

91 最近、改革派神学者の中から、原罪を病としてとらえていたツイングリを後の改革派神学と対話させる非常に興味深い研究が発表された。Oliver D. Crips, "Sin," Michael Allen and Scott R. Swann, eds., *Christian Dogmatics: Reformed Theology for the Church Catholic* (Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2016), pp. 194-215. また神化（deification）をルターとカルヴァンと対話させる興味深い試みもある。Roland Chia, "Salvation as Justification and Deification," *Scottish Journal of Theology*, vol. 64, no. 2 (2011): 125-139. そうしたなか、アウグスティヌスの *homo incurvatus in se* をルターやバルトと対話させるものも提起されている。Matt Jenson, *The Gravity of Sin* (London: T&T Clark, 2006). そうした最近の流れの中で、罪を、癒しを必

関しては、個々の罪の赦しについてはプロテスタンティズム的に理解し、罪の病については人を神の像へと回復させる癒しとして東方的聖化論を展開した。そうしたことから、彼の罪観には、プロテスタントとローマ・カトリック、また西方教会と東方教会のバランスが見られる。

こうした統合によってウェスレーが持っていた罪についての彼の神学的諸理解について、神学的不満や批判が多々起きてくるのは当然のことであろう。ただ、このようにして異なる神学的伝統との積極的対話を「公同的精神」[92]に則り日本福音主義神学会が用意された場にウェスレー研究も加えて頂いたこと、そしてウェスレーをクリティカルかつコンストラクティヴに読んで頂くことで日本の福音主義神学の諸伝統がますます栄えていくための一つの踏み台となるならば感謝である。

Soli Deo gloria.

（インマヌエル福岡教会牧師）

要とする病と考えまた実存的にとらえていたウェスレーと、他の神学的伝統との対話がますます望まれる。

[92] Wesley, *Sermon* #39, “Catholic Spirit.” 藤本『ウェスレーの神学』90–96 頁